

「標準救急医学」

日本救急医学会 監修

帝京大学教授 小林国男 編集代表者

救急医学は、医学・医療の先進国であるはずのわが国で最も立ち遅れた領域である。これは救急医療の体制づくりが十分でなかったこともあるが、救急医学とはどういうものかという概念も明確でなく、救急医学、救急医療についての教育が医学校でも、また卒後研修においてもほとんどなされてこなかったことにも原因がある。

救急患者、救急医療は臨床医学のどこの領域にも存在する。外科には外科の、内科には内科の、眼科には眼科の救急患者が存在する。そのため、“救急医学・救急医療”というまとめ方をした場合に、どこまでを、誰が、どのように治療し対処するのが明確になりにくいことも事実である。救急患者であっても、また救急患者であるからなおさらその初療が重要であり、その道の専門家がなすべきであるという側面がある。したがって、救急医学という学問体系、そしてその担当者がどのような専門家であるのかが、わが国ではまだ広く理解されていなかったように思われる。

今回、医学書院から上梓された本書は、わが国における“救急医学”

とはこういうものだということを明確に示した初めての成書である。監修が日本救急医学会となっていることから、わが国で救急医学の発展と確立に携わってきた方々の意気込みと姿勢とが窺われる。序文の中で杉本侃氏は、救急医学を「人間を一個の総合体としてとらえ、生命への脅威を的確に判断して対応するための学問的裏付け、これが救急医学である」と述べられている。これはやや抽象的な述べ方であるが、より具体的には、「重症救急疾患の診療、教育、研究を行う医学であり、その領域としては、外傷学、侵襲学、重症治療学、中毒学、症候学である（第1章“救急医学の概念”より）」ということになる。

更に本書の内容をみると、救急医学と救急医療、侵襲と生体反応、救急診断、救急処置、心肺蘇生法、救急医薬品、輸血輸液、重症救急病態、重症救急患者管理、外傷、熱傷、化学損傷、電撃傷、急性中毒、循環異常、異物、溺れ、刺咬傷、特殊感染症、被虐待児症候群、各種臓器の救急疾患、各科の救急疾患などが包含されている。これらは各科領域の救急疾患、救急治療のダイジェ

ストという側面もあるが、本書で最も特色があるのは、救急医学と救急医療(1)、救急診断(3)、ショック(8)、重症救急病態(9)、重症救急患者管理(10)などの各章であろう。“重症救急病態”の中には脳死に関する小節も設けられており、教科書としては画期的である。

わが国の救急医療を向上させていくためには、卒前教育の中でも救急医学、救急医療の教育を行う必要を痛感しているが、救急医学の卒前・卒後研修教育のテキストブックとして本書は最適である。医学生、研修医には必携の書であろう。更に本書には、医師であれば誰でも知っていなければならない基本的な診断、治療処置が網羅されており、日常診療にも座右に置いておきたい書物の1つである。

各章において節、小節などの項目立てが細かくなされているのも親切である。強いて難を言えば、X線写真の中に鮮明さを欠くものがみられること、治療についての具体性にやや物足りないところもみられるが、本書は主として学生のための教科書を意図したものと考えられ、また紙数も限られていることを考えれば、これで十分に納得できる。

(東京大学教授・第2外科)
出月 康夫

●B5 456頁 図200 写真135
原色図6 1991年 定価7,725円
(税込) 〒300円